ふべし、主上御皰瘡の時は、山王の猿も必ず痘を病は一奇事也、後光明院崩御の時、坂本の猿かろき皰瘡をたり、新帝御醫藥の時、山王の猿もがさ煩ひける、被なんど調せさせて賜ふ、ほどなく猿は死けり、帝は復本あらせたまふ、古書に此事見えず、長崎人は出痘の時を赤うでといひ、貫膿の時を白うでといふ、痘の乾くを畠毛物といひ、やゝ濕るを田津物といふも、芋といふに据也、琉球山南の人は痘疹を患へず、我邦八丈島の如し、

〔玉勝間十四〕裳瘡

續紀に、天平七年、自夏至冬、天下患豌豆瘡（俗曰裳瘡）、天死者多、これ皇國にて裳瘡のはじめか、されどこの記しざまは、はじめてとも聞えざるがごとし、また延暦九年にも、是年秋冬京畿男女年三十已下者、悉發捖豆瘡（俗云裳瘡）、臥疾者多、其甚者死、天下諸國往々而在と見ゆ、捖字は豌を誤れるなるべし、此瘡の名、これより後の書には、皰瘡といへり、皰疱同じことなり、今の世にも、はうさうといふ、又いもといふ、されば昔もがさといへるは、いもがさの省きか、

〔和漢三才圖會十人倫之用〕痘痕　豆瘡、豌豆瘡、疱瘡、皰瘡、和名裳瘡、芋瘡訓上略乎、

按、痘根、俗稱滅茶、一名徧婆、（名義未知其據）痘愈後痕微窪也、

〔仁和寺御傳〕大御室性信、（略）中延久四年秋、東宮（白河）有御疱瘡事、玉顏之上有其痕、依令旨於本房修藥師法、修中有御夢想、有一高僧、衣裳染香云、自仁和寺藥師法壇場來、以香水灑御面、夢覺之後其痕如拭、

〔碩鼠漫筆二〕あばたといふ瘡痕の名（附いもといふ名義）

世俗の里言に、皰瘡の痕の治りあへぬを、あばたといふは、梵語よりや出けむ、無下に近ごろいひでためれど、ふと浮屠氏などの呼そめたりしが、普く世間に弘まれるにもあるべし、かく思ひとらるゝ由は、翻譯名義鈔卷ノ二地獄篇に、八寒冰地獄の名を明したる中に、一を頞浮陁（アブタ）又頞部陁（ともあり）